

秋期大会を終了して

コーチ会監督
鈴木哲夫

総評

全体として

各学年の成績については、問題ないと思います。子供達はよく頑張ってくれたと思います。

結果として、3年生は2位トーナメント優勝、女子は準優勝、5年生は決勝トーナメント1回戦、といった結果が残りました。

コーチの思惑、親の期待、等々ではありますが、まずは、子供達に拍手を送ってあげたいと思います。

公式戦での配慮

さて、今大会を振り返ってみますと、チームとしての根本的な問題から、個々の学年でのさまざまな課題、または共通の課題等が浮かび上がってきます。各学年個別の問題や技術的課題は後述するとして、まず、一番気になったのは、試合に出場できない子供に対するサポートです。

ウイングスは親子でサッカーを楽しむことを第一のテーマとして掲げています。普段の練習や練習試合、レクリエーションの中では、すべての子供に平等にチャンスを与え、「全員がサッカーを楽しむ」という目的はかなりのレベルで実現できていると思われます。しかし、公式戦においては、「その時点でのベストメンバーで勝つことを目標に最善を尽くす」ために、一部の子供しか試合に出場できないという矛盾が生じます。

これは、ウイングスの結成当初からずっと言い続けてきたことであり、このこと自体は問題ない¹のですが、そうはいつでも、やはり、試合に出場できない子供達が楽しい訳はありません。

指導者としては、この点を十分に注意し、その試合に出場出来なかった子供達に対するサポートに神経を使って頂きたいと思います。

具体的には

試合に出場できなかったことを、「どうせ僕はちゃんにはかなわないから・・・」「どうせ僕は補欠だから・・・」と思わせてはなりません。その試合に出場で

きなかったことを、「次の試合には僕が出るんだ!」といった、前向きの動機付けに利用できれば最高です。

細かいことですが、「レギュラー集合!」とか、「補欠はこっちに集まれ!」といった表現も好ましくありません。その時点では確かに先発の1人には入れないかもしれませんが、長い目で見た場合、今の時点での身体能力や技術は問題とはならず、むしろ、子供達がどの位やる気になっているかが将来の彼らにとって重要な問題となります²。

指導者として、子供達の今だけではなく、将来も考え、すべての子供がやる気をだすようなサポートを考えて下さい。今大会ではこの部分のサポートが不足しているように感じました。

ベンチワークについて

女子の試合で非常に興味深い事例がありました。それは、GHU対大谷戸の試合でしたが、その試合の前にGHUは南百合丘を1:0で破り、その時点で首位にたっていました。南百合丘、GHU、大谷戸、ウイングスが1敗で並び、後は得失点差で勝負が決まるという状況で、大谷戸戦を向かえたのですが、GHUは順当に2点を先行し、このまま行くかと思われた後半に、FWの子供をGKに下げ、15分には、試合に出場出来なかった2年生をDFで出場させました。

その結果、残り5分の間に2点を入れられ、引き分けとなり、せっかく掴んだ優勝のチャンスを逃してしまいました。このポジション変更とメンバーチェンジは、優勝を狙うとしたならば、明らかなベンチの采配ミスです。

しかし、この采配をした監督は、なるべく全員を試合に出してあげたいという思いから、この采配を行ったのだと思います。

このことの是非については、たぶん賛否両論いろいろな考えが出てくると思います。しかし、私の個人的見解を言わせて頂ければ、この監督は「勝ちにいく試合」と「楽しむ試合」の区別がついていないのだと思います。

繰り返しになりますが、「勝ち」を意識して(または「優勝」を意識して)臨む試合は全力を尽くすべきです。それは、子供達がそうであるように、ベンチで采配をふるうコーチ、監督にもいえることです。出場できなかった子供達は確かにかわいそうかもしれませんが、ベンチの中途半端な采配で負けたとしたならば、試合に出場していた子供達はもっとかわいそうです。

「勝ちにいく試合」については、ベストメンバーで最

¹ サッカーが競技スポーツである以上、勝ち負けにこだわる試合がなくてはなりません。真剣に勝ちにこだわり、そして勝ったり負けたりする中から発見できる楽しさや苦しさを子供達に教える必要があるからです。

² これもまた、何度もテーマとして扱っていますが、今だけではなく、生涯サッカーを楽しめるよう、サッカーを好きにさせることが指導者としての義務と考えます。

後まで戦うのが基本であると思います。ですから、逆に、出場できなかった子供達のフォローを真剣にする必要があるのです。皆さんはどのようにお考えでしょうか？

サッカーのスタイルについて

ウイングスのサッカー

技術的課題に入る前に、ウイングスとして、どのようなサッカーを目指すのかを確認しておきたいと思います。

サッカーのスタイルにはブラジル型とかヨーロッパ型、その中でも各国独自のスタイルがあり多種多様ですが、ウイングスとして目指してもらいたいのは、まず、個人技主導型のサッカーです。それが出来て初めて細かくパスをつなぐ組織的なサッカーをやってもらいたいと考えます。勿論、コーチの考え方や好みでスタイルが多少は違って来ますが、「竹槍サッカー」³や「ピンポンサッカー」⁴でなければ良いと思いません。

ボールを持ってない・キープ出来ない(1対1で勝てない)子供がパスをつなげられるはずがありません。

低学年のうちにはまず、自分でボールを持ったら絶対離さないでゴールまでもって行くんだ、といった気持ちを大切にしておいて下さい。個人技術をとにかく高めて、その上で、組織的な動きが出来るサッカーがウイングスの目指すスタイルであって欲しいと願っております。

今大会を振り返って

サッカーのスタイルの違いということで、非常に興味深い試合がありました。3年生の試合でしたが、東住吉と戦って2対2でPK戦となった試合です。

東住吉の3年生は昨年の2年生大会の優勝チームで、かなり強いとの評判でしたが、とにかく、ポッコンポッコンとボールを蹴り込んでくるチームでした。

私は大会本部席で、他の協会役員の方と一緒に観戦していたのですが、チームカラーの違いがはっきりできて非常に面白いという評価を回りから頂きました。

縦パス(しかもロングパス)を多用する東住吉に対して、横または後ろへ短いパスを送り、サイドへ展開

し、中へ折り返すウイングスの攻撃パターンがあまりにも対象的であったからです。私としては、このようなサッカーは5年か6年になって、個人技術がかなりついてきた時点からで良いと思っているのですが、今年の3年生は早くもそれをやり始めており、本部席でそんな話をしながら、結構うれしかったものです。

そのような話から、学年ごとのスタイルの違いについての話になったのですが、同じチームであっても、横割りの、学年単位で動いているチームは毎年カラーが違うという話になりました。

チームの考え方の問題ですが、やはり学年ごとにスタイルが違うのはどのようなものなのでしょうか？

1、2年の、個人技術も出来ていないうちには不可能なことです。ある程度以上の技術がついてきた時に、常にウイングスのスタイルをどの学年でも出来ている、そういうチームであってほしいと思います。

技術的課題

全体として

まず感じたのは、思いの外、私達のチームの子供達は、ボールを止める・蹴る・運ぶの基礎技術が出来ていないということです。個人的な思いでは、川崎市の中でも結構基礎をしっかりとやっているチームの1つだという思いがありましたが、試合を見ていると、同じ学年でありながら、基礎技術がウイングスよりもはるかに優れているチームがありました。

ボールをコントロールできなければ、サッカーになりません。同じタイプのサッカーをするチーム同士であれば、技術力が上のチームが必ず勝ちます⁵。

せっかく先にボールに触っても、コントロールをミスったために相手に取られてしまうケースや、いわゆる「めくら蹴り」をよく見かけました。自分たちが実際にやってみて解る通り、このボールコントロールは実に難しい技術です。特に試合の中では、常に相手のプレッシャーを受けながら行わなければならないため、余計難しい技術となります。しかし、この年代に一番身につけなければならない技術が、このボールコントロールなのです。

全体を通して、まず、このボールコントロール技術

³ 縦に長いロングパス1本で、足の早いFWを飛び出させて得点をねらう、いわば、かけっこ勝負のサッカーを「竹槍サッカー」と呼びます。

⁴ 状況判断が出来ず、目の前にあるボールをただ蹴り合っているだけのサッカーを「ピンポンサッカー」と呼びます。低学年にはありがちなことですが、高学年になってもこのようなサッカーでは困ります。

⁵ 根性だけで勝てるほどスポーツは甘くありません。勿論、気力・集中力も重要な要素ですが、それは相手も同じです。であれば、やはり技術が上のチームが勝つのは自明の理です。

を再度徹底して練習の中に組み入れるべきである、と感じました。

以下、各学年についての技術課題と思われるものを述べます。

3年生

まず、一番気になったのは、子供達の技術レベルに差が付きすぎているということです。試合に出場した子供達はみな、3年生としては標準以上の技術を身に付けております。これはこれで良いのですが、その他の試合に出場出来なかった子供達がどんどん彼らのレベルから取り残されているような気がしてなりません。例えば、佐本、宇津木、松島の3名が抜けたらその代わりが出来る子供はいるのでしょうか？ 例えば5年生で、岩崎、鈴木、宮内が抜けても、FWには三須、永井、DFには田中、斉藤といった、子供達が育てております。多少力は落ちるかもしれませんが、それでも十分なチームが作れるようにすべての子供達を育ててあげるのが急務と思われるます。

この年代は、やる気があればどんどん技術レベルは上がって行きます。1つ1つの練習に真剣に取り組ませることと、子供達に達成感を与えてあげることで、練習がおもしろい、サッカーが楽しいとなるよう、今以上に努力をしてみてください。

技術的な課題としては、やはりボールコントロールにつきると思います。特に浮いた玉の処理とヘディングはもっと練習に取り入れても良いと思います。試合に出場した子供達には、立ったままの状態ではなく、前や横に動きながらトラップをするような練習が効果的かもしれません。子供は単調な練習を嫌いますので、同じ基礎練習でも多少毛色を変えることにより、あきさせない工夫も大切です。コーチの人数が不足しているという問題もありますが、同じ練習メニューの中でも、出来る子供にはさらにプラスアルファの課題を与える⁶などして、工夫してみてください。

個人戦術について、特に今から始める必要はないと思いますが、1対1での守り方、攻め方の基本は教えてあげたほうが良いでしょう。あくまでもこの時代は個人技術を向上させることを第一義に考えた指導が好ましいと思います。

全体として、この1年間で一番成長した学年が3年生ではないでしょうか。子供達もやる気があり、技術も向上してきています。結果として1位トーナメントには出場出来ませんでした。十分満足のゆく結果だ

⁶ 1対1のパス練習ならば、ワンタッチで落とす所を指定して2タッチ目で即パスを出すようにする、とか、パスの目標を狭めるとかの課題を与えると良いでしょう。

と思います。勝負にこだわる時期は終わりましたので、これからしばらくは肩の力を抜いて、全員が楽しみながら実力をつけてゆく本来の形に戻って欲しいと思います。

5年生

この学年の特徴としては、普通のチームと対戦する時はおもしろいようにパスもつながり、自分達のサッカーができるのですが、多少強いチームと当たるとバタバタしてしまい、まったく自分達のサッカーができなくなるということです。これは、基本的なボールへの寄りとボールを保持する姿勢や位置が悪いこと、そして、プレッシャーの中でのボールコントロールがまだまだ出来ていないことによると思われるます。特に中盤でのボールコントロールが十分ではないため、FWにつながらない場面をよく見かけました。

また、ボールキープが出来ても、回りのサポートがないために相手に奪い返されてしまう場面も目につきます。ポジションチェンジやサポートの動き等はこれから先の課題の1つとなりますので、2対3や3対3の練習の中で個人個人が自発的にそういった動きが出来るようになるまで練習したほうが良いでしょう⁷。この課題については、まず、パス&ゴールが出来ていないと話にならないのですが、まだ、プレーをした後（パスを出した後）に立ち止まってしまふ姿が多く見受けられます。普段の練習の中で、「蹴ったら走る」習慣をつけるのが第1歩であると思います。

また、ポジションごとの基本的なカバーリングについても教える必要があると思います。特にDFについては、状況判断と、それに応じたカバーリングが出来るか出来ないかが決定的な要素になりますので、（型にはめる必要なまったくありませんが）そろそろ教えてあげた方が良い時期にさしかかっていると思われるます。

基本的なボールコントロールで、決定的に不足しているのがヘディングの技術です。頭でいけば簡単にボールを取れる場面で、ボールが落ちてくるのを待ったために相手に取られてしまう場面が多すぎます。ヘディングで相手と競り合うのは勇気が必要です。単純な向かい合いのヘディング練習ではなく、相手がいる状況⁸でヘディングが出来るよう、もっと練習をすべ

⁷ サポートの動きと、スペースに走り込む動き、スペースを作る動きの違いを理解させ、その状況において自分がどの動きをするのかを明確に意識させながら練習させると良いと思います。

⁸ 練習の順番として、まず、横に相手を立たせるだけの状態から始め、次には相手が体を触っている状態、次は押している状

きです。

全体としては、すべての子供達のレベルが上がってきており、Bチームでも結構良い試合ができるようになっていきます。これは非常に良いことですので、試合に誰を出そうか困る位になるよう、これからも頑張ってもらいたいと思います。

女子

川崎市の相対的な実力からいったら、勿論トップクラスであり、チーム全体のまとまり（チームとしての技術力）については、川崎一であると思います。

ただし、それはあくまで「川崎市」の中でのことであり、はたして県に通用するかといったら、話は別です。

このことは私に言われるまでもなく、三田副監督をはじめとするコーチの方の一致した見解であると思います。

では、県レベルの試合をする上で何が不足しているか、というと、まず決定的なのが（やはり）ボールコントロールです。3年生と同じように、浮き玉の処理が本当に弱く、思ったように止められない、蹴れない状態です。春に比べるとかなり進歩していると思いますが、ほとんどプレッシャーのない状態でもトラップミスをします。川崎市の現在のレベルでは、それでも通用しますが、県のベスト4を狙うのならば、もっともっと基礎練習を積み重ねる必要があります。ボールに対する寄りはかなり良くなっていますが、肝心のトラップがうまく行かないため、なかなか正確なパスが出ないようです。

女子の場合、単一学年でチームを組めないこともあり、技術力・体力のばらつきがかなりある状態となっておりますが、ボールコントロールやパス&ゴールの基本的な動きに関しては学年に関係なく、今以上に練習メニューに組み入れると良いと思います。

もう一つ気になる点は、意志の感じられないプレーが多いということです。自分が取ったボールをどうしたいのか、キープするのか、パスを出すのか、ドリブルするのか本人も考えられないうちに闇雲に前に蹴り出しているプレーがかなり目に付きました。これでは「ピンポンサッカー」です。個々のプレーに明確な意志を持たせながらプレーをするよう指導したほうが良いと思います。そのためには、単純に目の前のボールを蹴らず、まずキープ（トラップ）する癖をつけることです⁹。失敗しても良いから、まずボールをコントロ

ールするよう練習を繰り返して下さい。

全体としては、技術力も上がり、チームとしてのまとまりも良く、残念ながら準優勝とはなりましたが結果も残せ、満足できる大会であったと思います。勝つことが当たり前のように言われておりましたが、そのようなプレッシャーの中でそれなりの結果を残したことについては十分評価すべきであると考えます。6年生にとっては最後の公式戦になる、次の県大会に向けて、全員で頑張れるよう期待します。

態、最後に競り合っている状態と、段階を踏みステップアップして行くのが良いでしょう。

⁹ 本当ならば、ボールをもらう前に回りの状況を判断し、次のプ

レーをイメージしながらボールをコントロールすべきですが、まずは、ボールを止めてからでも良いから、回りを見る癖をつけることでしょう。